

早稲田大学 文学部 一般入学試験問題の訂正内容

【国語】

(二) 左から6行目 (問題用紙6ページ)

(誤)

)と述べている。

(正)

)」と述べている。

(二) 問十三 (問題用紙7ページ)

(誤)

傍線部C「自己を投影するに過ぎない愛情」の～

(正)

傍線部C「自分を投影するに過ぎない愛情」の～

以上



〈2011 H23052024〉

注 意 事 項

- 1 問題冊子および記述解答用紙は、試験開始の指示があるまで開かないこと。
- 2 問題は3～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて解答用紙の所定欄にHBの黒鉛筆またはHBの芯を入れたシャープペンシルで記入すること。
- 4 試験開始後、記述解答用紙の所定欄（2か所）には受験番号と氏名を、マーク解答用紙の所定欄には氏名を記入すること。
受験番号の数字は特に正確に記入すること。読みづらい数字は採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。
- 5 マーク欄には、はつきり記入すること。また、訂正する場合は、消しゴムでていねいに、消し残しがないようによく消すこと。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

マークする時	● 良い	● 悪い	○ 悪い
マークを消す時	○ 良い	● 悪い	○ 悪い

- 6 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 7 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の文章は林達夫が一九三九年に書いたものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。

ルネ・デカルトの『哲学の原理』は、そこに書かれてあることを思想的に理解するには少しもむずかしい書物ではないが、それを書かせたデカルトの腹を探って見て行くと、実はなかなか複雑な心理的風貌を具えた書物である。第一に、あの古風なスコラの定型で一種の教科書を書くに至った彼の動機は何であったか。これは、あの『方法叙説』で全く旧套を脱した斬新な叙述形式をこの哲学改革家が採用していることを知っているものにとつては、ちょっと解し兼ねる「逆戻り」ではなからうか。第二に『哲学の原理』——これはもとラテン語で書かれたものだが——のフランス語訳に付けられている彼の有名な「序文」をよく読んでみると、何かはつきり見定め難い「謎」のようなものにおつかることを経験しないものがあるだろうか。旧弊な「学者先生」たちにすつかり愛想をつかして、ずぶの素人の共感と協力を求める一種の陳情書のようにも思えるし、自分の仕事と使命とがもはや越え難いアンシヨウに乗り上げたときらめて、後に来る世代にそれを譲り渡そうとする一種の哲学的遺言状のようにも見える。

ところでもう一つ事情を複雑にしているのは、この「序文」をそのどつちで解釈するにしても、そこに現わされている（あるいは秘められている）彼の考えは、最初、彼が自分の哲学体系をスコラの伝統的形式の鑄型に容れて述べようとしたときの意図とは、まるつきり違っているのみか、正面から相対立させようとしていることである。つまり、一六四四年の元の『哲学の原理』のときには明らかに学校の学者たち、言いかえるとジェスイトたちをあてにしているのに、一六四七年のフランス語訳のときになるともうそれらの人々を尻目にかけてまるで相手にしてないからである。これはフランス語訳そのものがその性質として一般の読者層を相手にするというところから来ているには違いない。しかし他面において——この方が重要だと思おうが——これはデカルトの計略が完全に失敗したことの結果ではなかったであろうか。

私は計略という言葉を使ったが、デカルトはどんなときにも慎重を極めた戦略家として物を書いていた（否、書くことを余儀なくされていた）学者であつたということをおぼえてはならない。彼は自分の考えを自由に述べるような状態には、思想的自由を目差して移住していたオランダにおいてさえ、決して置かれていなかったのだ。ここに彼がある学者のいうように「**I**」の哲学者」たらざるを得なかつた理由があるわけで、そこでまた彼の知的活動において、いわばデカルトのポリテイクとも言うべきものがいつも彼の思想発表の方式を支配していることに目をとめなければならぬ理由があるのである。

奇妙な話だが、デカルトという科学者は、いつも書きたいものが書けず、むしろ書きたくないものを、その書きたいもの（いわば代用品として書いてきた人間なのである。彼がいちばん最初に発表したかったもの、そして一生を通じてそれにいちばん執着していたものは、世界の変革の武器である自然の全面的研究と全体的説明——つまり『宇宙論』であつた。しかしそれにはスコラの旧学問の陣営からの反撃と思想警察の機関からの迫害というものを当然予期してかからなければならなかつた。彼のこの危惧は一六三三年のガリレイの処罰によつて身に迫る実感となつた。『宇宙論』にはガリレイの地動説と所見を同じくする部分が含まれていたもので、もしそれが発表されれば、デカルトも当然教皇庁の法廷に召喚される運命になることは明らかであつたのだ。そこで「私はほとんど決心して私の原稿をみんな焼こうとした、あるいは少なくとも見せまいと思つた」のである。『方法叙説』（一六三七年）はこの『宇宙論』の代用品として、しかも世論の打診という意味ではなほだ輪晦的な形で書かれたものである。これは当時トクメイで発表されたことも付言しておこう。

ところで、この書物の反響は、「ガリレイ事件は依然として解消されていない」ということをデカルトに知らしめた。ジェスイトたちは、果然その攻撃の矛先をデカルトの **II** 的部分に向け、一方彼はその思想の少なからぬ共鳴者たちによつていわば「デカルト学派」とでもいふべきものの首領の地位に祭り上げられたからして、同志の質問に答え、敵の駁論に反撃するといふ、予定に入れていなかった新しい仕事が増え、しかもそれと共にソルボンヌによつて彼の所説をどうかして公認されることの必要は、彼をますます彼の「気の進まぬ」形而上学の仕事に没頭せしめることになつたのである。『省察』（一六四〇年）はこのような事情のもとに成立したものであり、だからそれは彼の仕事のプランから言うところの一種の逸脱であり、彼はあくまでも自然研究をその本筋の仕事と考えていたのである。かくて、つまりはマリタンたちの言うように、「デカルトが形而上学をやつたのは、自然学のためなのである。」科学的真理に安全な支柱を供給するといふことが、彼の形而上学に求めた唯一のものなのである。彼が形而上学を書きながら、いかに自然学のことを思っていたかは、彼が『省察』を発表するに先立って友人に書き送つた次の手紙からも明瞭に知ることが出来る。

「……私があなたにお送りするこの少しばかりの形而上学は私の自然学すべての原理を含んでいる。」「これは内緒だが、この六つの省察は私の自然学すべての基礎を含んでいることを申し上げる。だが、どうかそれを口外しないように願いたい。というのは、アリストテレスの味方どもは恐らくそれを承認するにますます難色を見せるだろうから。そして私が希望するのは、**甲**、それがアリストテレスのそれを破壊することに気づく前に。」

この内緒ぶりこそ、彼がソルボンヌの承認を得るための、一つの計略であつたに外ならぬ。彼はここで一大奇襲戦を企画していたのである。彼が神の学を樹立したのは、物の学に到達するためであつて、これは従来のように神の学に到達するために物の学を樹立するとは全く別個のことであつた。

それでは第三の著作である当の『哲学の原理』はいかにして成立したのであろうか。一口に言えば、彼は自分の哲学改革のプランが成就するためには、**乙** が絶対に不可欠であると考えるに至つたからである。ところで当時の学校はジェスイトたちが掌握していて、正にスコラ主義、アリストテレス主義の巢窟に外ならない。そこで彼はここで行なわれている哲学の教科書、しかもなるべく共同製作で公的権威を有するようなものをおくれこれ物色してこれを徹底的に撃破するという作戦を立てた。しかしこうした仕事の準備をしている最中に、彼は突然考えが変わつた。一六四一年に彼の書いている手紙は、この間の

消息を伝えていると言えよう。

「……ほんとうを言えば、私はこの『哲学』（スコラ哲学）を撃破するというもくろみをつかり失くしてしまつた。なぜなら私の哲学を樹立するというそれだけのことで、それは全く明らかに破壊されてしまうから、別に撃破などを必要としないからである。」彼は真理が自分の側にあるということを堅く信じたので、いつかはジェスイトたちがデカルト主義をアリストテレス主義にかわつて学校で教える日の来ることを待望したのである。とすると、何も事を荒立てて、彼らに恥をかかすにも当たらない。彼がその仇敵に手を差し伸べて同盟のゼスチュアを見せるに至つたのは、かかる事情によるのである。かくて『哲学の原理』はジェスイト学校用の教科書として書かれたのだ。デカルトは一時それをもつと **III** に、「哲学汎論」と名付けようとしたほどである。アリストテレス主義を打倒するデカルト主義のすがたを示そうとして闘志満々たる気概をもつて立ち上がった彼が、一種の妥協と和平との書物、デカルト主義を伝統的哲学の中へ潜入させるという形の書物を書くに至つたわけは、ここに求められる。これは思想戦における武（偽？）装平和の興味ある一例というべきものではなからうか。

さて、この作戦は功を奏したであろうか。三年の後に現われたフランス語訳に付せられた「序文」こそは、まさしくその現地報告のようなものである。デカルトの社会的経験は旧陣営の度し難い頑迷固陋さと自分の哲学のジンソクなる勝利行進の一片の夢にすぎなかつたことを無慈悲に教えただけであつた。失望、落胆、混迷、彷徨……この時のデカルトの深刻な心理的動搖の良心的記録としてかの「序文」は読まなければならない。ここに見られる「使命をもつ人間」の悲劇は、規模こそ小さいけれど我々思想家もまた一般に分け持っているものだから、私などはそれを読むごとにいつも身につまされる思いがするのである。

〔「デカルトのポリテイク」による〕

注 スコラ：ラテン語で「学校」の意。ヨーロッパ中世における教会や修道院で、附属学校の教師などが研究し教授した学問をスコラ哲学という。

ソルボンヌ：フランス中世の中心的な教育研究施設ソルボンヌ学寮をさす。創立者ソルボンの名にちなむ。

問一 傍線部 A 「あの古風なスコラの定型で一種の教科書を書くに至つた彼の動機」とはなにか。その説明として最も適當なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ デカルトは自らの所説を、権威であるソルボンヌに認めさせるためには学校の学者たち、すなわちジェスイトの支持を必要としたので、彼らの古風なスコラ主義の定型にあわせて所説を教科書風に書いてみたということ。

ロ デカルトは、研究の本筋である自然研究が旧学問の陣営や思想警察的機関に見つからずひそかに続けられれば、たとえ旧式のスコラ主義、アリストテレス主義に迎合しても苦にはならなかつたのでそれを選んだということ。

ハ デカルトは、真理は自分の側にあり所説は近い将来学校で教えられる日が来ると信じたので、今はことを荒立てる必要はない、仇敵であるスコラ主義のジェスイトたちに組みするふりをするのが得策だと考えたということ。

ニ デカルトは、自らの所説をどれほど韜晦的に書いてもいつこうに下火にならぬ、学校を牛耳るスコラ主義学者たちの執拗な攻撃をかわすため、とりあえず彼らに従順であるふりをしてやりすごそうと企てたということ。

問二 空欄 I に入る最も適當な語句を、それぞれ次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | | | |
|-----|--------|---|-----|---|------|---|------|
| I | イ 裏面 | ロ | 仮面 | ハ | 素面 | ニ | 浚面 |
| II | イ 自然学 | ロ | 宇宙論 | ハ | 形而上学 | ニ | 地動説 |
| III | イ スコラ風 | ロ | 哲学的 | ハ | 原理的 | ニ | 専門書風 |

問三 傍線部 B 「ポリテイク」とあるが、本文中これと最も近い意味で使われている語を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | | | | | |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|
| イ | 反撃 | ロ | 樹立 | ハ | 計略 | ニ | 変革 | ホ | 勝利 |
|---|----|---|----|---|----|---|----|---|----|

問四 空欄 甲 に入る最も適當な表現を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | |
|---|-----------------------------------------------|
| イ | それらを読む人たちが知らずしらずのあいだに私の原理に慣れ親しみ、その真理を認めることだ |
| ロ | アリストテレスの味方どもが、六つの省察に含まれた私の原理の危険性を嗅ぎつけたいことだ |
| ハ | あなたが私の原理に隠された危険な自然学の基礎を、アリストテレスの味方どもに口外しないことだ |
| ニ | 自然学を攻撃する者たちが、私の原理に自然学のすべての基礎が含まれていると見誤ることだ |

問五 空欄 乙 に入る最も適當な表現を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- | | | | | | | | |
|---|--------|---|-------|---|--------|---|---------|
| イ | 教科書の破棄 | ロ | 学校の支配 | ハ | 物の学の樹立 | ニ | 公的権威の打破 |
|---|--------|---|-------|---|--------|---|---------|

問六 傍線部C「使命をもつ人間」の悲劇」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 自分の主張に自信を持ちそれを世に広めることを願う人間が、圧倒的な敵に対し表面的に妥協して当面やりすごそうとするものの、敵にその作戦を見破られ結局は主張を捨てざるを得ない事態に立ちいたること。
- ロ 真理は我にありと確信し、真理を社会に認知させようとする人間が、形だけのはずだった敵との戦略的妥協がいつのまにか敵の容認に変わってしまった、やがて敵陣営に仲間として迎え入れられて自己不信に陥ること。
- ハ 世界変革につながる真理の運びとへの伝道を企てる人間が、それを阻む敵への攻撃が不可能と考え、唯一の活路として選んだ敵との偽装平和は見破られないものの、将来的な展望が不確かで不安な気持ちになること。
- ニ 自分の主張を世に広めることを与えられた重大な任務と思いついた人間が、主張を曲げるのではなくひそかに押し通そうと、敵との妥協と平和とを戦略的にとるものの、まったく奏効せず、絶望的になること。

問七

次の中から本文の論旨に合致するものを二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 『哲学の原理』は、一六四七年のフランス語訳に付けられている「序文」を読めば、書かれてあることを思想的に理解するのはむずかしくない。
- ロ デカルトが極めて慎重な戦略家であったのは、最初に公刊した『宇宙論』によって、ジェスイトたちに危うく迫害されそうになったからである。
- ハ 『方法叙説』を書くことでデカルトは、思いがけずも、同志たちによって「デカルト学派」の首領の位置に祭り上げられてしまった。
- ニ 『省察』は、デカルト本来の仕事である自然科学に安全な支柱をあたえるのを意図して、形而上学的方法で書かれた。
- ホ デカルトの偽装平和の作戦が悲劇に終わるのを知れば、現代の思想家はそんな作戦をとるべきでないのは自明である。

問八

傍線部1～3の太字のカタカナの部分の漢字に直せ（漢字は楷書ではっきり書くこと）。

(二) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

それぞれの学問には、それを修得するために必要な基礎知識とそれを運用する技能、そして目標達成のための手段である方法の複合体——それがディシプリンであろう——があるという見方は、自然科学や社会科学にとっては自明の理であろう。人文学、とくにその中でも文学研究においては、ディシプリンの輪郭と内容が明確でない場合が多いが、それでも職人的な訓練という意味合いでなら、どの学科においてもディシプリンを欠かすことはできない。

甲

ただし、へやりたいこととディシプリンの関係は一筋縄ではいかない。あらかじめ関係が予測できて、その予測が的中するのは、むしろ幸福な例外ではあるまいか。いかなる研究も結局は同じことかもしれないが、とにかくパスカル研究は、その点、複雑で困難な事情を抱えている。

まず、パスカル研究は、いかなるディシプリンに所属するのか。あらゆる研究が、その進展に伴ってディシプリンを越境・侵犯していくことは理の当然である。しかし、たとえばシェイクスピア研究やデカルト研究であれば、少なくとも出発点においては、それぞれイギリス文学と哲学に属するという共通の了解がある。だが科学者であり、思想家であり、宗教者であり、さらに彼自身はそのレットテルを拒否したであろうが、文学者でもあるパスカルについては、最初から、どのディシプリンの研究対象になるかが問題、場合によっては係争事項にさえる。パスカルをめぐるディシプリンの闘争があるのである。

次に、パスカルは熱烈なキリスト教信仰の持ち主であり、その観点から人間の学問のむなしさを批判してやまなかったが、その彼を研究の対象として取り上げることには矛盾はないのか。また彼と信仰を同じくしないものが、彼を研究するとはいかなることか、それは可能なのか。

最後に、パスカルとは異なる文化的伝統のうちに生い育ち、異なる言語を母語とする研究者は、いかなる言語で、またいかなる読者を対象として、その成果を発表すればよいのか。さらに、発表言語の選択が研究の内容に影響を及ぼすことはないのか。ここには、実は、研究活動とその成果の受容および判定はいかなる土俵で行われるのか、という深刻な問題が潜んでいる。今日、自然科学の領域で、国を問わず、英語で成果を発表することが一般化しているのは、その真偽のほどは注意深く検討しなければならぬにしても、とにかく研究の土俵が世界で一つだと考えられているからだろう。しかしより言語に密着した文化、とくに外国の文学と思想が問題になる場合、言語の相違を越えた共通の研究の土俵が考えられるだろうか。これは何も、たとえばパスカルについて、日本人が自らの研究成果をフランス語で発表し、それをフランスの学界に認めさせることができないうことではない。そしてこのような研究者としての出自と生い立ちが、自分の人文学とフランス文学に対する見方とスタンスの取り方を大きく規定してきたことも事実である。だが、いささか大仰な物言いをすれば、そのような成果はそのままでは、フランス文化には組み込まれても、日本文化の財産にはならない。(フェルマーの大定理)の証明がどの言語でなされようと、全世界の数学者の財産となるのは事情が違う。人文系の学問では、いかなる土俵で研究を行うかが研究の前提にあり、ときにはそれが紛争の原因にさえる。

パスカルの体験と思索と表現を、哲学や神学に解消することなしに、その個別性において把握したいと望むものにとつて、探究の最終的な拠りどころは彼の残したテキストをおいて他にない。そしてそのテキストは、明晰と洗練の誉れが高いとはいえ、三〇〇年以上前のフランス語で綴られており、二〇世紀の日本人にとっては、いや実はフランス人にとつてさえ、必ずしも十全な理解は容易ではない。テキストに即しての研究を目指す場合には、言葉からのアプローチが不可欠である。*

しかし「言葉からのアプローチ」というのは、いわゆる語学のことだろうか。現代フランス語の運用能力を身につけ、さらに時代を遡って、一七世紀フランス語の知識を修得すれば、おのずとパスカルが理解できるのだろうか。それはまるで、日本語を母語とするものは、西田幾多郎がおのずと分かるというのに似ている。西田は哲学者だ、だから哲学の素養が必要だといわれるか。それは間違っていないが、不正確な物言いだ。第一、哲学の知識があれば西田が抵抗なしに理解できるのなら、西田の哲学への貢献は無に等しいことになりはしないか。それ以上に、この種の議論で気になるのは、言語は内容を欠いた伝達的手段なのだから、内容はそれぞれの専門知識あるいはディシプリンに任せておけ、という前提が見えかくれしているように思われることだ。しかし当たり前なことだが、内容のない言葉など存在しない。とりわけ歴史の荒波を越えて今に伝えられたテキストのそれぞれには、はち切れんばかりの内容とメッセージが込められている。書かれた文字をその内容と姿形に即して理解することを目指すディシプリンはあるべきだし、またあるはずだが、それを何と呼べばいいのか。

「言葉 (logos) への愛」を意味する文献学 (philologia) と、それも「知恵 (sophia) への愛」である哲学 (philosophia) との対比で捉えられた文献学こそ、それではないか。一七世紀末に編纂されたフランス語辞書は、文献学を定義して、「文法、修辭学、詩学、考証、歴史、そして一般的にあらゆる著作家の文献批判と注釈から構成される学問。一言でいえば、あらゆる種類の学問と著作家に関わる普遍的な文学 (littérature universelle) と述べている。哲学が、しばしば数学をモデルとして普通学 (mathesis universalis) を標榜したとすれば、文献学もまた文字の観点から普通学を目指す。しかもそれが、「文学」すなわち「文字の学」と呼ばれているのは意味深い。文学 (littérature) が、哲学や歴史から切り離された独自の文化活動と見なされるようになったのは、ヨーロッパにおいても、高々二〇〇年のことにすぎない。それ以前の文学は、「文字で書き表されたもの(＝学問)についての深い学識、知識」を意味していた。いってみれば、文学・部への文学、いや文学部は文学・学問だというのなら、文学の総体と重なりあっていたのである。伝統的な用語法に従えば、文献学と文学

は同一の普遍的なディシプリンとして、人文学の全体さらには学問の全体に及んでいたといつてよい。たとえばパスカルの数学論文あるいは神学的著作を、文学が考察の対象として取り上げて何の不思議もないのである。

だからといって、文献学が、対象の核心にある信仰や世界観に分け入って、その真偽と価値について、判定を下すことができるというわけではない。それどころか、対象として考察しているつもりは相手から、逆に裁き返されることは常に覚悟していなければならぬ。じつさいパスカルは、学問の出発点にさえ、他者を出し抜き支配したいというエゴイズムが巣くつてい

ることを告発してはなかつたか。この意味で、文献学において、研究者と研究対象との間の緊張と葛藤は決して解消されることはないだろう。

しかしそれが「言葉への愛」に促されて、ある人間の体験と思想を、彼の書き残したテクストに即してよみがえらせようとする試みである限り、文献学は、端的にいえば他者への愛に通じている。対象への愛情なしに、いったいだれが、残されたテクストを書き手の意図に寄りそって読み解くなどという七面倒くさい作業を続けられるだろう。だがその結果、よみがえったかに見えた対象のメッセージは、しばしば読み手の意表を突く。自分に引き寄せて、愛していたつもりを対象が、異形の姿を現すのである。それが対象に対する興味を失わせることもあろう。しかし、自分を投影するに過ぎない愛情は、研究においても、トートロジーしか生み出さない。対象に対する違和感は、愛情と並んで文献学のもう一つの原動力なのである。しかし翻

つて考えてみれば、愛情と違和感は、だれにでも身に覚えのある表裏一体の感情ではないか。この意味で文献学は、その対象領域においても、またその動機においても、万人に関わる **乙** な営みなのである。

(塩川徹也『発見術としての学問』による)

問九 本文中には、論旨の展開からいって不適当な文が一つ挿入してある。それはどれか。*印をつけた箇所よりも前の部分から選び、その文の最初の三字と最後の三字を記せ(句読点等も一字と数える)。

問十 次の四つの文を並べ替えて空欄 **甲** に入るようにしたとき、三番目に来るものはどれか。その記号の記入欄にマークせよ。

イ 学問の出発点には、たいていの場合、そうした探求の対象となる問題やテーマ、興味あるいは崇拜の対象となる人間、さらには感動の源泉となる作品等、漠然としてはいても、手触りの感じられるへやりたいこと[△]があるのではないか。

ロ 未来の数学者を夢見る少年は、未解決の——もっとも解決されてしまったらしいが——「フェルマーの大定理」や、決闘で命を落とす前の晩に友人に宛てて自らの発見を書き送ったガロアの話に胸を躍らせたことがきつとあるに違いない。

ハ それに比べれば、ディシプリンはむしろへやりたいこと[△]の実現を可能にする手段の側面が強いことは否定できないだろう。

ニ しかし翻つて、若者がある学問に憧れを抱き、その道を志す地点に立ち戻ってみると、ディシプリン自体の魅力が彼を引きつけることはむしろ少ないのではないか。

問十一 傍線部 A「その個別性において把握したい」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 一般的な学問分野からはみ出る特異な地位を尊重しつつ、考えて行きたい。

ロ それぞれの分野における確かな地位を、しっかりと確かめつつ理解したい。

ハさまざまに変容した生涯の、その多種多様な姿こそ、ぜひとも明らかにしたい。

ニ 生身の人間から離れ自立して書かれたものとしての姿を、はっきり見つけたい。

問十二 傍線部 B「他者への愛」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 他者の持つている内実を何とか解明しようとする。

ロ 独立した他者として相手をしっかりと尊重すること。

ハ 自己と他者が一体化するような分析を試みる。

ニ 書かれたものとその書き手である他者を結び付けようとする。

問十三 傍線部 C「自己を投影するに過ぎない愛情」の説明として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ これこそ他者を理解する最もよい方法だとし、それを深くいつくしみ気持ち。

ロ 自分の能力を超えたものを優れたものと自己認識して、それを尊ぶ傾向。

ハ 自分の興味のあることに限定して、他者のある部分にひたすら関心を寄せる傾向。

ニ 自分とは明らかに違うはずの他者に、自分と同質のもののみ読みとろうとする心情。

問十四 空欄 **乙** に入る最も適当な漢字三字の語句を、本文中から抜き出して記せ。

問十五

次の中から本文の論旨に合致するものを二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 人文学に対する自分なりの見方は、他者を正しく理解しようとし、時には他者の新たな姿に驚く体験を通してこそ形成されるものである。
- ロ 人文学で大切なのは、現状を踏まえて研究の土俵を少しでも明確にすることであり、それがないと、ディシプリンをめぐる解決困難なジレンマに陥るだけである。
- ハ パスカル研究においては、パスカルと異なる文化環境にある者が、これまでとはまったく違ったディシプリンで研究することで、対象の持つ新しい生命の存在を発見することができるものである。
- ニ 真の文献学とは、単に古い文献を資料として突き放して観察するのではなく、文字によって形作られている〈文〉の中にこそ、書き手の思想や実質が潜むものだ、という見方を踏まえて、形成されるべきものである。
- ホ 三〇〇年前のフランス語の用法を体得しないとパスカル研究はできないとするのは誤った考えだが、昔のテクストにうかがえる独特なことばのあり方に注意してこそ、パスカルの現代における意味を浮かび上がらせる研究は可能となる。

(三) 次の文章は『浜松中納言物語』の一節である。中納言は、吉野に隠棲していた姫君とその母尼君を訪ねていたが、尼君の死後、都にもどろうとしている。これを読んで、あとの問いに答えよ。

雪は、いとど日を経て積もりゆくに、御忌もやうやう果てつかたになりゆくに、さてのみえ絶えこもり給ふまじければ、「京に出でなむ」とおほすに、「この姫君を **A** 見捨てむ。はかばかしく、いささか物おほえたる人もなかり。いみじきころざし思ふとも、雪降り積もりたる山道を、さのみ立ち返り、え渡るまじう、分け歩かじを、親の御かけにてのみこそは、おのづから過ごし給ひけめ、今は片時も、 **B** あととめ給はじ」と、我もいみじう見捨てがたきに、「引き続き出て出てもあしかるべし。おほしごころなど、さるべきやうにてこそ、迎へに來め」とおほすにも、いとうしろめたうおほつかなきに、おほしわづらひて、若君預かりたる中將の乳母の妹の、上野の国の守の具にてありけるが、国のことなどもなごし乱れて、つゆの残りもなく、わろびたる世をありわづらひて、さるべく頼もしかるべきよすが求めて、かきうつろひ、名残なく忘れにたるを、思ひなげき、いかならむ見えぬ山路もがなと、泣く泣く十七八ばかりなるむすめの、いとをかしげなるを身に添へて、かの中將の乳母のかけに隠れて過ぐるを、「心ばへと言ひ、預けたらむに、人おろかなる思ひなどすべくもあらず、あはれなるべき人々を」とおほし出でて、「あやしうおほすべけれど、くはしきありさまは、みづから聞こえむ。必ず、若き人具しておほせよ。うしろめたきことはよに聞こえじ」と、返す返す書き給ひて、迎へにつかはしたれば、「あやしう、にはかにいかなることならむ」と思へど、姉のゆかり、この君の御かけを頼もしきことに思ふ身なれば、淵にとありとも、いなぶべきかたなきに、中將の乳母も、「あしきさまに、見苦しからむこと仰せられむやは。さらばたたく参り給へ」と言ふ。

中納言は姫君に、「この日ごろ、御身に添ひ、影のやうにて、離れ、侍らぬときも侍らねど、いよいよ恐ろしう、うとまじきものにのみおほされたるは、いと恨めしけれど、かくてのみ、え開ちこもりては侍る **C** ば、出で侍りて、おほしますべき所など、さるべきやうにて、御迎へにと思ひ侍る。あからさまのほども、いとかうかすかなる御ありさまを、見捨てたてまつらむことの、いとわびしう、うしろめたう、おほつかなう侍るに思ひわづらひて、え避らぬもの侍るを、 **D** 立ち出でて侍らむほどの、身の代はりに添へたてまつらむとて、迎へにやり侍りにし。むすめなども見苦しからで侍り。例ならぬ人などおほし隔てで、なつかしうおほしつかせ給へ」と聞こえ給へど、いらへ聞こゆべき言葉などもおほえず、恥づかしうて、うち泣きて、顔引き入るるほかのことなきも、いとらうたげなるを、「ことわりかな。知らぬ男の、にはかに一つになりて、隔てなく、さすがに何の筋となく、かく添ひみたらむは、いかでか、女の、ふとうちいらへ、さはやかにおほせむ」と、あはれにおほえ給ひて、世の常ならぬ心のほどを言ひ知らせ給ふに、迎へ給ふ人、参りたり。

池田利夫校注・訳『浜松中納言物語』新編日本古典文学全集27 小学館(二〇〇二)
※Web公開あたり、著作権者の要請により出典追記しております。

問十六 空欄 **A** **B** **D** に入る最も適當な語を、それぞれ次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ(同じ記号を二度以上用いてはならない)。

- イ あからさまに □ いかでか ハ いよいよ ニ よも

問十七 傍線部1・6の内容として最も適當なものを、それぞれ次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- 1 イ 姫君はこれまで住んでいた所を立ち去らなくてはならないのだから迎えに来よう。
- 姫君がこれまで住んでいた所をきちんと片付けてから迎えに来るのがよい。
- ハ 姫君がこれから住む所の準備がきちんとできたから迎えに来たのだから。
- ニ 姫君がこれから住む所の準備がきちんとできたら迎えに来るだろう。
- ホ 姫君がこれから住む所をきちんと準備してから迎えに来よう。
- 6 イ 心やましく思っていることを世間に言いくらさないでほしい。
- 気がかりに思っていることを世間の人たちは知らないはずだ。
- ハ 気がかりに思っていることを世間に言いくらさないでほしい。
- ニ 決して心やましいようなことを打ち明けるわけではない。
- ホ 決して心配するようなことを依頼するわけではない。

問十八 傍線部2・4・5・7・8の「おほす」のうちで、敬意の対象が「姫君」であるものを選び、その記号の記入欄にマークせよ(該当するものが二つ以上ある場合は、そのすべてにマークすること)。

- 問十九 傍線部3がふまえている和歌として最も適當なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。
- イ 世の憂き目見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ
 - ここにても袖濡らせとや世の憂き目見えぬ山路の猶しぐるらむ
 - ハ 世の憂き目見えぬ山路の奥までも猶悲しきは秋の夕暮れ
 - ニ 涙にも何曇るらむ世の憂き目見えぬ山路の秋の夜の月

問二十 空欄 **C** には助動詞一語が入る。最も適當な語を、空欄にふさわしく活用させて記せ。

問二十一 次の中から本文の内容に合致するものを三つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 中納言は、姫君に仕えるものたちの心もとなさを見るにつけ、姫君を都にともない、世話をしなければならぬと思つた。

ロ 中将の乳母の妹の夫であった上野の国守は、乱脈な政治を行った後、頼るべき相手を求めて、中将の乳母の妹を見捨てた。

ハ 中将の乳母の妹は、中納言にならば自分の娘を託しても心配はないと考えた。

ニ 中納言は、中将の乳母の妹に事情を説明したうえで、自分の代わりに姫君の世話をしてくれるように頼んだ。

ホ 中将の乳母は、中納言の頼みを聞き入れるよう、妹に口添えをした。

ヘ 中納言が姫君に事情を説明しているところに、中納言が都にもどるためのお迎えがやってきた。

問二十二 『浜松中納言物語』の作者は『更級日記』の作者と同じ人物とする説が有力であるが、これが正しいとした場合、『浜松中納言物語』よりも前に成立した作品の中から三つを選び、その記号の記入欄にマークせよ。

イ 十六夜日記 ロ 蜻蛉日記 ハ 源氏物語 ニ 古今和歌集 ホ 徒然草 ヘ 平家物語

(四) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ(返り点・送り仮名を省いた箇所がある)。

楊素^ニ將^レ營^ニ仁壽宮^ヲ引^{キテ}封倫^ヲ為^ス土木監^ト。隋文帝至^リ宮所^ニ見^テ制度^ヲ奢侈^ヲ大怒^{リテ}曰^{ハク}楊素^ヲ為^{セリ}不誠^ヲ矣^{ツクシテ}。殫^ニ百姓^ノ之力^ヲ雕^ニ飾^シ離宮^ヲ使^{ムト}吾^ヲ結^バ怨^ヲ於^ニ天下^ニ。素惶^ク恐^シ慮^シ將^レ獲^レ譴^ル。倫曰^{ハク}公^ハ當^ニ弗^レ憂^ヘ待^ク皇后^ノ至^ル必^ズ有^ニ恩^ヲ詔^シ明日^ニ果^{シテ}召^シ素^ヲ入^リ對^シ。獨^ニ孤^ノ后^ノ勞^ハ之^ヲ曰^{ハク}公^ハ知^{リテ}吾^ガ夫^ヲ妻^年老^イ無^キ以^テ娛^レ心^ニ盛^ニ飾^ル此^ノ宮^ヲ豈^ニ非^ニ孝^順素^ノ退^{キテ}問^フ倫^曰卿^ハ何^ヲ以^テ知^ル之^ヲ對^曰至^ニ尊^ハ性^ニ **A** 故^ニ初^メ見^テ而^ル怒^ル然^ル雅^ニ聽^ク后^ノ言^ヲ后^ハ婦^人也^ニ惟^ダ麗^ノ是^レ好^ム后^ノ心^既悦^ニ帝^ノ慮^必移^ル所^ニ以^テ知^ル耳^ト素^ハ嘆^{シテ}伏^{シテ}曰^{ハク}揣摩^ノ之^ノ才^非吾^ノ所^ニ及^ブ素^ハ負^ヒ貴^ヲ恃^リ才^ヲ多^シ所^ニ凌^グ侮^{スル}唯^ダ擊^ニ賞^ス倫^ノ。

〔旧唐書〕による

注 楊素…人名。 仁壽宮…宮殿の名。 封倫…人名。 土木監…建築の監督官。 隋文帝…隋の初代の皇帝。 制度…建物のつくり。 獨孤后…隋の文帝の皇后。 至尊…隋の文帝を指す。 擊賞…おおいにほめる。

問二十三 傍線部1「慮將獲譴」は「まさにけんをえんとすとおもんばかる」と読む。この読み方に従って、記述解答用紙に返り点をつけよ(送り仮名はつけないこと)。

問二十四 空欄 **A** に入る最も適当な一字を次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。
イ 薄 □ 悪 □ 厚 □ 善 □ 儉 □ 直

問二十五 傍線部2「帝慮必移」の意味として最も適当なものを次の中から選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 皇后に対する皇帝の態度はきつと好くなります。
- ロ 楊素に対する皇帝の思いはきつと変わります。
- ハ 皇后に対する皇帝の思いはきつと深くなります。
- ニ 皇帝は皇后の気持ちがあきつと変わると思っています。
- ホ 皇帝は仁壽宮に住居を移すことをきつと決めます。
- ヘ 楊素に対する皇后の思いもきつと好くなります。

問二十六 傍線部3「揣摩」とは「事情をおしはかること」であるが、封倫はどのような事情をおしはかったのか。その内容と合致するものを次の中から二つ選び、その記号の記入欄にマークせよ。

- イ 皇帝は豪華な宮殿を造営したために、天下の人々から怒られるであろう。
- ロ 楊素は豪華な宮殿を造営したために、皇帝から厳罰を受けるであろう。
- ハ 皇后の意向を受けて、皇帝は楊素に恩詔を授けるであろう。
- ニ 楊素は忠臣であるので、皇帝は楊素の言う事に従うであろう。
- ホ 皇帝夫妻は年老いているので、豪華な宮殿を喜ばないであろう。
- ヘ 皇后は女性であるので、豪華な宮殿を喜ぶであろう。

〔以下 余白〕

<2011 H23052024>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定の欄以外に番号・氏名を書いてはならない。



(四) 問二十三

(三) 問二十

問十四

(二) 問九

(一) 問八

(採点欄)

<2011 H23052024>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 所定の欄以外に番号・氏名を書いてはならない。

(四) 問二十三

慮
将
獲
譴

(三) 問二十

問十四

(二) 問九

(一) 問八

	1
	2
	3

国

語 (記述解答用紙)

大 学 部